

新刊紹介

◎未来の生物資源ユーカリ——そのバイオテクノロジーとバイオサイエンス——
西村弘行編（福田利雄ほか13名共著），A5版，xiii + 274 pp.，内田老鶴圃，
1987年5月1日発行，価5,800円。

ユーカリがわが国でうけている評価は正直のところそれほど高くないと思う。このところのコアラ人気で，その飼料としてあちこちで栽培が手がけられているし，また，いわゆるバイオマス資源として一部で注目されているが，具体的な研究はそれほど進んでいないように思う。しかし，世界とくに熱帯の造林に眼を移すと，ユーカリのもっているポテンシャルは測り知れないものがある。恐らく，そのようなグローバルな視点からこの書物は刊行されたものと思うが，このことは，冒頭の3通の推薦のことにとも伺える。その1人は，光合成の研究でノーベル賞をもらったカルビン教授（カリフォルニア大学）であり，ほかのお二人もオーストラリア国立大学の教授である。

昨年（1986年）の *Unasylva* (152号) に，“ユーカリは生態的に有害か？”というややジョッキングな紹介文が載っていたが，その前書きによると，ユーカリは今や世界の80か国以上で植栽されており，造林地は400万haを超えているという。オーストラリアと，インドネシア・フィリピンの一部，PNGを郷土とするユーカリは，今やアジア，ヨーロッパ，南北米大陸，アフリカと，すべての大陸に植栽され，それぞれに相応の評価をうけており，バイオテクノロジーの進展が目覚ましいご時勢ということもあって大きな夢がもたれている。

本書は，ユーカリの成分などを精力的に研究されてきた新進気鋭の化学者西村弘行氏を中心となり，幅広い人材を得てユーカリのすべてについて紹介を試みた異色の書物である。共著者のプロフィールまで紹介する紙数はないが，農学，林学，薬学，工学の専門家を動員して，次のような構成で書かれている。第1章：ユーカリの特徴と育成技術（p. 1～32），第2章：ユーカリ油の特徴（p. 33～57），第3章：ユーカリの大量生産システムと燃料化（p. 59～97），第4章：ユーカリの有用成分（p. 99～184），第5章：ユーカリのバイオテクノロジー最前線（p. 185～237），第6章：ユーカリの総合利用（p. 239～266）。本書が最も力をいれているのはユーカリの化学で，1/3強はユーカリが含む各種の成分の化学を取扱っている。書名からうける印象よりもはるかに学術的で，化学に弱い読者にはややとっつきにくいと思うが，ユーカリに関心のある方，バイオマス利用に関心をもたれる方には是非おすすめしたい好著である。

なお，樹木としてのユーカリについては，本書でも分担執筆されている石川健康氏が書かれた「緑化樹としてのユウカリ類」（1980年刊）およびブライオー著（石倉成行訳）「ユーカリの生物学」（1981年刊）があることを念のため付記したい。

（浅川澄彦）